

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	渡邊 直美
<p>[論文題名] Functional analysis of <i>Discoidin domain receptor 2</i> mutation and expression in squamous cell lung cancer</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Lung Cancer, 110, 35-41, 2017</p> <p>著者名 Naomi Kobayashi-Watanabe, Akemi Sato, Tatsuro Watanabe, Tomonori Abe, Chiho Nakashima, Eisaburo Sueoka, Shinya Kimura, Naoko Sueoka-Aragane</p> <p>[要 旨]</p> <p>① 研究の目的 近年 Discoidin Domain Receptor2 (DDR2) の変異が、肺扁平上皮がんにおいて新たな分子標的治療の候補であると報告されてきたが、その役割については十分には理解されていない。日本人臨床検体における発現、変異を解析するとともに、それらの役割を解明した。</p> <p>② 方法 ヒト肺がん臨床検体および細胞株において、免疫組織学的染色、DNA シークエンスを行った。また DDR2 の安定的高発現株を樹立し、細胞浸潤アッセイやマウスモデルにより浸潤・転移能を評価するとともに、遺伝子発現マイクロアレイ、リン酸化タンパク質アレイ等を用い DDR2 の生物学的意義について検討した。</p> <p>③ 結果 肺扁平上皮がんの 29% に DDR2 が高発現し、3.9% にミスセンス変異(T681I)を確認した。DDR2 T681I 高発現株を移植したマウスに比べて、野生型高発現株を移植したマウスで生存期間が短縮した。DDR2 高発現株において MMP-1 の発現量の増加、c-Jun のリン酸化亢進が見られた。</p> <p>④ 考察 DDR2 は c-Jun のリン酸化を介して MMP-1 の遺伝子発現を誘導することで、肺扁平上皮がんの転移・進展に関与している可能性が示唆された。この現象は T681I 変異型高発現株では見られず、不活性型変異であると考えられる。</p> <p>⑤ 結論 DDR2 の高発現は、肺扁平上皮がんにおける有望な分子標的と考えられる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	高松 裕一郎
<p>[論文題名] Differences in the genotype frequency of the <i>RNF213</i> variant in familial moyamoya disease patients in Kyushu, Japan.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Neurologia medico-chirurgica, in press</p> <p>著者名 Takamatsu Y, Higashimoto K, Maeda T, Kawashima M, Matsuo M, Abe T, Matsushima T, Soejima H.</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的 <i>RNF213</i> はもやもや病 (MMD) の易罹患性遺伝子で、日本人と韓国人では <i>RNF213</i> のバリエントが MMD 発症に強く関連することが明らかとなっている。一方、本土 (本州、四国、九州) の日本人の間では遺伝系統学的な差異があることから、本バリエントの遺伝子型頻度についても地域によって異なる可能性がある。本研究では、九州の MMD 患者と健常対照者における遺伝子型頻度を国内の他地域の頻度と比較・検討した。また、遺伝子型解析におけるパイロシークエンス法の有用性についても検討した。</p> <p>方法 九州出生の MMD 患者 91 名 (散発性 70 名、家族性 21 名) と九州在住の健常対照者 108 名の末梢血ゲノム DNA を用いて <i>RNF213</i> バリエントの遺伝子型をパイロシークエンス法にて解析し、遺伝子型頻度を既報の頻度と比較解析した。27 名についてはサンガー法で解析し、結果を比較した。</p> <p>結果 散発性 MMD における遺伝子型頻度は既報の結果と違いはなかったが、家族性 MMD では九州の患者と九州以外の患者との間に有意差を認めた。また、健常対照者については、九州と西日本で違いはなかったものの、東北では MAF (minor allele frequency) が有意に低かった。また、パイロシークエンス法はサンガー法と同等の信頼性を持ち、より簡便・安価であることがわかった。</p> <p>考察 家族性 MMD の対象患者数がやや少ないものの、遺伝子頻度に違いがあることが示唆された。健常対照者については、他の SNPs 解析でも東北地方の遺伝的差異が指摘されていることから、本バリエントの MAF が低いことはこの遺伝的差異に基づくと考えられた。</p> <p>結論 九州の家族性 MMD 患者と東北の健常対照者における <i>RNF213</i> バリエントの遺伝子型頻度は、日本の他地域と異なることが示唆された。パイロシークエンス法は有用な解析方法である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	伊東 陽一郎
<p>[論文題名]</p> <p>High Cost of Hospitalization for Colonic Diverticular Bleeding Depended on Repeated Bleeding and Blood Transfusion: Analysis with Diagnosis Procedure Combination (DPC) Data in Japan</p> <p>大腸憩室出血において入院医療費が高額となる要因は再出血と輸血である:DPC データを用いた解析</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Digestion, in press</p> <p>著者名 Yoichiro Ito, Yasuhisa Sakata, Hisako Yoshida, Sayuri Nonaka, Susumu Fujii, Yuichiro Tanaka, Shimpei Shirai, Eri Takeshita, Takashi Akutagawa, Hiroharu Kawakubo, Koji Yamamoto, Nanae Tsuruoka, Ryo Shimoda, Ryuichi Iwakiri, Kazuma Fujimoto</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 大腸憩室出血の危険因子の検討は多くの研究によってなされているが、入院医療費が高額となる危険因子についての報告はほとんどない。今回、DPC データを用いて大腸憩室出血における危険因子について検討した。</p> <p>【対象・方法】 2009 年～2015 年に大腸憩室出血の診断で佐賀大学附属病院に入院した患者 78 名。なお、複数回入院歴がある患者は初回のみを対象とした。すべての患者は 3 日以内に下部消化管内視鏡検査が施行された。入院医療費の平均値は 445,091 円であり、500,000 円未満を低額、500,000 円以上を高額と定義し、各患者の年齢・性別・基礎疾患・抗血栓薬の内服状況・入院時のヘモグロビン値・内視鏡的止血の有無・再出血の有無・輸血の有無について解析した。</p> <p>【結果】 単変量解析では高齢者・高血圧の既往・入院時ヘモグロビン低値・再出血を来した症例・輸血を要した症例で有意に高額となった。これらの項目について多変量解析を行うと、再出血を来した症例・輸血を要し症例で有意に高額となった。</p> <p>【結論】 大腸憩室出血において入院費が高額となる危険因子は再出血と輸血であった。内視鏡的止血については入院医療費に関与せず、再出血・輸血を未然に防ぐためにも積極的な内視鏡検査が有用である可能性が示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	竹下 枝里
<p>[論文題名]</p> <p>Higher Frequency of Reflux Symptoms and Acid-Related Dyspepsia in Women than Men Regardless of Endoscopic Esophagitis: Analysis of 3,505 Japanese Subjects Undergoing Medical Health Checkups</p> <p>女性では、内視鏡での逆流性食道炎所見が乏しいにも関わらず、酸逆流症状やディスペプシア症状の訴えが強い； 日本人人間ドック受診者 3,505 例を対象とした研究</p> <p>雑誌名，巻（号のみの雑誌は号），頁一頁，発行西暦年 Digestion, 93, 266-271, 2016</p> <p>著者名 Eri Takeshita, Yasuhisa Sakata, Megumi Hara, Kayo Akutagawa, Natsuko Sakata, Hiroyoshi Endo, Takashi Ohyama, Keiji Matsunaga, Tomomi Yoshioka, Hiroharu Kawakubo, Yuichiro Tanaka, Shimpei Shirai, Yoichiro Ito, Nanae Tsuruoka, Ryuichi Iwakiri, Motoyasu Kusano, Kazuma Fujimoto （竹下枝里，坂田資尚，原めぐみ，芥川加代，坂田奈津子，遠藤広貴，大山隆，松永圭司，吉岡智美，川久保洋晴，田中雄一郎，白井慎平，伊東陽一郎，鶴岡ななえ，岩切龍一，草野元康，藤本一真）</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】酸逆流症状やディスペプシア症状は，日常적으로よく遭遇する消化器症状である．今回，改定 F スケール問診票を用いて，人間ドック受診者の消化器症状，内視鏡所見の特徴を明らかにすることを目的とした．</p> <p>【方法】当院の関連施設 5 病院で施行された人間ドック上部消化管内視鏡検査のうち，3,505 例を対象とした．症状の評価は改定 F スケール問診票（GERD 様症状 7 問，FD 様症状 7 問）を用いた．</p> <p>【結果】男性 1,922 例，女性 1,583 例，年齢の中央値：52.0 であった．若年群（50 歳未満），女性，GradeA 以上の逆流性食道炎群で有意に改定 F スケールスコアが高値であった．また，F スケールの各質問に対して 2 点（時々）以上を示す者は，GERD 様症状では 7 項目中 2 項目，FD 様症状では 7 項目中全ての項目で男性より女性の割合が多かった．F スケール 6 点以上を高スコアとした場合，そのリスク因子は若年，女性，食道裂孔ヘルニア，逆流性食道炎であった．内視鏡上逆流性食道炎がないにも関わらず F スケールが高値である群では，女性の割合が有意に高かった．</p> <p>【考察】若年者や女性の方が消化器症状を訴えやすく，また女性においては必ずしも内視鏡での逆流性食道炎重症度と一致しているわけではないと考えられた．</p> <p>【結論】今回の調査では若年者及び女性において消化器症状を有する割合が高かった．</p>			

備考 1 論文要旨は，600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は，研究の目的，方法，結果，考察，結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名 永柄 真澄
<p>[論文題名] Work-sharing and male employees' mental health during economic recession</p> <p><i>Occupational Medicine</i>, kqx135, 2017 Sep 14. https://doi.org/10.1093/occmed/kqx135</p> <p>著者名 Masumi Nagae, Maiko Sakamoto, Etsuo Horikawa</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的 本研究の目的は、景気後退期に、ワークシェアが日本の従業員の作業環境の心理社会的変化と抑うつ症状にどのように影響したかどうかを調べ、どの心理社会的因子が、従業員の精神衛生を予測するか明らかにすることであった。</p> <p>方法 標準化された職業性ストレス調査票 (Job Content Questionnaire : JCQ) とうつ性自己評価尺度 (Self-Rating Depression Scale : SDS) を使用し、2008年の世界的な景気後退期の始め (T1) と6ヵ月後 (T2) に日本の製造業の企業で調査が行われた。</p> <p>結果 336人の男性の従業員2回の調査に回答し、そのうち24%は、T1で抑うつ症状を示した。従業員の勤務時間と仕事のストレス値が減少 ($p < 0.001$) したにもかかわらず、SDSスコアは、6ヵ月後に変化しなかった。2つの調査期間に社会的援助が低かった人は、人口統計学的要因、ライフスタイル要因、職場因子、勤務時間とベースラインの抑うつ症状を調整した後も、T2抑うつ症状と関係していた。</p> <p>結論 仕事ストレスの減少は、従業員の抑うつ症状に影響を及ぼさなかった。本研究期間に、社会的援助の低い従業員は、有意に抑うつ症状を示す危険性があり、職場の中の社会のおよび感情的なサポートがワークシェアリング時期にも重要なことを示唆した。</p>			

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	田中 雄一郎
<p>[論文題名] Risk Factors for <i>Helicobacter pylori</i> Infection and Endoscopic Reflux Esophagitis in Healthy Young Japanese Volunteers</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Internal Medicine, in press</p> <p>著者名 Yuichiro Tanaka, Yasuhisa Sakata, Megumi Hara, Hiroharu Kawakubo, Nanae Tsuruoka, Koji Yamamoto, Yoichiro Itoh, Hidenori Hidaka, Ryo Shimoda, Ryuichi Iwakiri, Kazuma Fujimoto (田中雄一郎、坂田資尚、原めぐみ、川久保洋晴、鶴岡ななえ、山本甲二、伊東陽一郎、樋高秀憲、下田良、岩切龍一、草野元康、藤本一眞)</p> <p>[要 旨]</p> <p>【背景/目的】 若年者におけるヘリコバクターピロリ感染と逆流性食道炎について背景因子について比較検討した。</p> <p>【対象】 期間：2010年～20116年、対象：佐賀大学医学部学生健康ボランティア 550名 (22～30歳)、方法：上部消化管内視鏡検査、アンケート (Frequency Scale for the Symptoms of GERD : FSSG)、ヘリコバクターピロリ尿中抗体測定</p> <p>【評価方法】 ヘリコバクターピロリ感染の有無、逆流性食道炎の有無について調べその背景因子について多変量解析を行い関連を調べた。(SPSS 使用)</p> <p>【結果】 ヘリコバクターピロリ感染者は45人と全体の8.2%であった。逆流性食道炎は38人と全体の6.9%であり、そのうち grade A は37人、grade B は1人であった。 ヘリコバクターピロリ感染のリスクとしては幼少期の井戸水摂取が判明した。 逆流性食道炎のリスクとして性別 (男性) と肥満 (BMI>25) が判明した。</p> <p>【まとめ】 今回の検討では、若年健康成人におけるヘリコバクターピロリ感染と逆流性食道炎のリスク因子が判明した。 また、日本において若年者は高齢者と比較して逆流性食道炎は増加傾向でありピロリ菌感染は減少傾向であることが示された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	馬場 耕一
<p>[論文題名]</p> <p>Hypoxia-induced ANGPTL4 sustains tumour growth and anoikis resistance through different mechanisms in scirrhous gastric cancer cell lines</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Scientific Reports, 7, 11227, 2017</p> <p>著者名 Koichi Baba, Yoshihiko Kitajima, Shuusuke Miyake, Jun Nakamura, Kota Wakiyama, Hirofumi Sato, Keiichiro Okuyama, Hiroshi Kitagawa, Tomokazu Tanaka, Masatsugu Hiraki, Kazuyoshi Yanagihara & Hirokazu Noshiro</p> <p>[要 旨]</p> <p>【背景/目的】スキルス胃癌 (SGC) は高頻度に腹膜播種を来す悪性度の高い癌である。アンジオポエチン様タンパク 4 (ANGPTL4) は低酸素誘導される分泌タンパクであり、これまで癌進展において種々の機能が報告されているが、一定した見解はなく controversial である。本研究では、SGC 細胞株における ANGPTL4 の生物学的機能を解析した。</p> <p>【方法】常酸素 (20%O₂) /低酸素 (1%O₂) 環境における胃癌細胞株の ANGPTL4 の発現を比較検討した。ANGPTL4 高発現 SGC 細胞株 58As9 の ANGPTL4 安定ノックダウン細胞株 (KD) とコントロール細胞株 (SC) を樹立し、常酸素/低酸素環境下で単層培養/浮遊培養を行い、その機能を比較した。また、マウス皮下移植モデル/腹膜播種モデルを作成し、比較検討した。</p> <p>【結果】低酸素環境において、SGC 細胞株はその他の胃癌細胞株に比し、ANGPTL4 発現が高く、また、低酸素誘導因子 (HIF) -1 により制御されていた。単層培養において、KD は SC に比し細胞増殖が低下し、c-myc 抑制/p27 促進を認めた。マウス皮下移植モデルでは腫瘍形成が完全に抑制された。浮遊培養では、KD は低酸素環境下で anoikis がより促進され、pro-survival signal である FAK/Src/PI3K-Akt/ERK signal が抑制された。KD の anoikis 感受性は recombinant 全長型/C 端型 ANGPTL4 添加で有意に抑制され、ANGPTL4 が 58As9 の anoikis 耐性に寄与することが証明された。また、マウス腹膜播種モデルにおいて KD は播種形成が完全に抑制された。</p> <p>【結論】ANGPTL4 は異なる機序で SGC 細胞株の増殖と anoikis 耐性に寄与しており、腫瘍増殖、腹膜播種形成を制御している可能性がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	脇山 幸大
<p>[論文題名]</p> <p>Low-dose YC-1 combined with glucose and insulin selectively induces apoptosis in hypoxic gastric carcinoma cells by inhibiting anaerobic glycolysis</p> <p>雑誌名：Scientific Reports (2017年8月23日 accept)</p> <p>著者名：脇山幸大,北島吉彦,田中智和,金木正夫,柳原五吉,相島慎一,中村淳,能城浩和</p> <p>[要 旨]</p> <p>【はじめに】低酸素誘導因子(HIF-1)は低酸素環境下で安定化する転写因子であり,癌浸潤・転移能亢進,抗がん剤耐性, energy 代謝変容に作用する.よって臨床応用可能な抗HIF-1α療法は新規抗癌剤開発へと繋がる.当研究室では,胃癌細胞株 58As9 より HIF-1α knockdown(KD)株を樹立し,低酸素環境下での Warburg effect(WE)破綻→過剰活性酸素(ROS)産生→apoptosis 誘導を立証し報告した.</p> <p>【目的】HIF-1α 阻害剤と glucose+insulin(GI)併用による apoptosis 誘導機序および臨床応用の可能性について解析・検討する.</p> <p>【結果と考察】15種のHIF-1α 阻害剤による apoptosis 誘導を常酸素および低酸素環境で解析した.その結果,58As9 を低濃度 YC-1(10μM)処理すると,低酸素環境のみで apoptosis 誘導を認めた.同処理は低酸素環境下 HIF-1α 発現抑制および細胞内 ROS 蓄積を誘導した.NAC 処理により低酸素環境での ROS 産生および apoptosis は抑制され,低酸素環境→YC-1→HIF-1α 阻害→過剰 ROS 産生→apoptosis 機序が立証された.細胞外フラックスアナライザー解析では,CoCl₂ 存在下での OCR/ECAR 比はYC-1により有意に上昇しWE 阻害が示された.さらにYC-1 処理にGIを付加することにより低酸素下 58As9 の ROS 産生および apoptosis 誘導は増強した. GI 付加は 58As9 の GLUT1 膜上発現増強→glucose uptake 増加を惹起した.その結果,YC-1 単独に比し acetyl-CoA 産生増加,乳酸産生減少→WE 阻害増強→さらなる過剰 ROS 産生が立証された. Nude mouse 皮下腫瘍 model において少量YC-1(1mg/kg)投与はPBSに比し,腫瘍内HIF-1α 発現消失と apoptosis 誘導を認め腫瘍増大を抑制した.さらにYC-1+GI 併用投与にて apoptosis 増強と著明な腫瘍抑制効果が見られた.免疫染色でも,YC-1+GI は,腫瘍内の HIF-1α 発現および pimonidazole 蓄積を減少させた.逆に,腫瘍内 8-OHdG および apoptosis marker の level を増加させた.</p> <p>【結論】低用量 YC-1+GI 療法は,OXPHOS の強制的な活性化を介して ROS を過剰産生する低酸素環境下癌細胞を標的とする栄養補給+抗癌作用を併せ持つ新規治療法である.</p>			

備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	東 裕一
<p>[論文題名] Effect of limbering up of the muscles attached to the pelvis on the strength of upper and lower extremity and trunk muscles through the transitional network</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 The Journal of Physical Therapy Science, 30, 11-17, 2018</p> <p>著者名 東裕一、浅見豊子、市場正良、岡真一郎、吉塚久記</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 本研究の目的は、骨盤に付着する筋の運動が、運動をしていない部位の筋に与える影響を検討し、臨床応用への可能性を検討することである。</p> <p>【方法】 対象は平均年齢 23.6 ± 3.7 (18-33) 歳の健常成人男性 152 名とした。 多くの筋との連絡をもつ胸腰筋膜に連続する大殿筋上部、ハムストリングス、内腹斜筋に対する運動を選択し、左右各 20 回行わせた。 腹筋・背筋の筋力測定を行った群を A B 群 (49 名)、膝屈筋・伸筋の筋力測定を行った群を K 群 (42 名)、肩屈筋・外旋筋の筋力測定を行った群を S 群 (61 名) とした。各群を各々非運動群と運動群に分けた。 筋力測定は徒手筋力計 (mobie、SAKAI 製) を使用し、対象者を座位にて等尺性随意最大収縮をさせ、骨盤に付着する筋の運動前後に別な筋群の筋力を測定した。測定値は体重比とし、運動前と運動後で比較した。</p> <p>【結果】 A B 群については、大殿筋とハムストリングスの運動において、腹筋筋力と背筋筋力が有意に増大した。K 群については、大殿筋の運動において膝伸筋筋力が増大し、内腹斜筋の運動において膝屈筋筋力が有意に増大した。S 群については、大殿筋の運動において肩屈筋筋力が有意に増大した。</p> <p>【結論】 骨盤に付着する筋の運動により、体幹および上肢や下肢の筋力の増大が得られた。このことは、体幹および上肢や下肢の傷害のリハビリテーションにおいて傷害されていない部位の運動が筋力維持もしくは増強に関与する可能性を示唆している。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	桑代 卓也
<p>[論文題名]</p> <p>Impairment of health-related quality of life in patients with chronic hepatitis C is associated with insulin resistance.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Gastroenterology, 49 巻, 317-323 頁, 2014 年</p> <p>著者名 Kuwashiro T, Mizuta T, Kawaguchi Y, Iwane S, Takahashi H, Oza N, Oeda S, Isoda H, Eguchi Y, Ozaki I, Anzai K, Fujimoto K.</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】C型慢性肝炎患者では健常人と比較し、QOLが低下しているとの報告があるが、その詳細は明らかではない。我々は HCV や内臓脂肪蓄積により惹起されるインスリン抵抗性がC型肝炎に多大な影響を及ぼしていることを報告してきた。本研究では、インスリン抵抗性を含めた宿主因子やウイルス因子がQOLに影響を与えているかについて検討した。</p> <p>【方法】本研究は、C型慢性肝炎治療前のデータと、その際に収集したアンケートから解析した横断研究である。対象はC型肝炎患者175例(平均年齢56.4歳、男性84例、女性91例)で、全例に健康関連 Quality of Life(QOL) 尺度 Short Form-36(SF-36)質問表によるQOL評価、および75g糖負荷試験を行った。QOLはSF-36解析ソフトにより、身体機能、日常役割機能(身体)、身体の痛み、全体的健康感、活力、社会生活機能、日常役割機能(精神)、心の健康の8項目について点数化し、それぞれの項目が集約された身体的健康感(PCS)、精神的健康感(MCS)の数値と、インスリン抵抗性の指標 HOMA-IRで、相関関係を検討した。また、MCS、PCSをそれぞれ2群に分け、臨床項目ごとに単変量解析を行い、統計学的に有意差をもった項目で多変量解析を行った。</p> <p>【結果】QOLの各項目は日本人1544例のデータと比較しGHのみが低かった。HOMA-IRはPCSと負の相関をするが、MCSとは相関がなかった。多変量解析では、HOMA-IR 2以上がPCSと関わる独立因子として抽出された。</p> <p>【結論】C型肝炎患者のQOLにインスリン抵抗性が関与することが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	山本 甲二
<p>[論文題名]</p> <p>Perforation and Postoperative Bleeding Associated with Endoscopic Submucosal Dissection in Colorectal Tumors: An Analysis of 398 Lesions Treated in Saga, Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Internal Medicine in press</p> <p>著者名 Koji Yamamoto, Ryo Shimoda, Shinichi Ogata, Megumi Hara, Yoichiro Ito, Naoyuki Tominaga, Atsushi Nakayama, Yasuhisa Sakata, Nanae Tsuruoka, Ryuichi Iwakiri, Kazuma Fujimoto</p> <p>(山本甲二、下田良、緒方伸一、原めぐみ、伊東陽一郎、富永直之、中山敦史、坂田資尚、鶴岡ななえ、岩切龍一、藤本一眞)</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】大腸内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD endoscopic submucosal dissection)は2012年4月より保険収載され、一括切除率が高く多くの施設で施行されるようになってきている。保険収載後の大腸 ESDの合併症についての報告は少なく、今回は保険収載後の大腸 ESDの合併症について評価を行った。</p> <p>【方法】2012年4月から2016年5月に佐賀大学及び関連病院で保険適応である20-50mmの大腸腫瘍に対してESDを施行された症例373症例(398病変)について合併症(後出血、穿孔)のある群とない群で患者背景、臨床・病理学的所見、処置後クリップの有無等について後ろ向きに比較を行い、合併症のリスクについて評価した。</p> <p>【結果】373症例の平均年齢は68.7±9.9歳であり、平均切除時間は74.0±56.2分(20-427分)であった。後出血は398例中19例(4.8%)、穿孔は12例(3.0%)で認められた。後出血・穿孔例は内視鏡処置で対応可能であり、緊急手術を要した症例はなかった。後出血のリスクとして多変量解析では病変部位が直腸と、処置時間が長いことであった。穿孔のリスクについて多変量解析で処置時間が長いことだった。</p> <p>【考察・結論】保険収載後の大腸 ESDは、それまでの報告と比較して合併症は多くなく、新たなリスクもなく安全に施行できると考えられた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	松浦 聡子
<p>[論文題名] Outcomes of patients undergoing endoscopic hemostasis for the upper gastrointestinal bleeding was not influenced by the timing of hospital emergency visit in Japan.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Digestion 印刷中</p> <p>著者名 Satoko Matsuura, Yasuhisa Sakata, Nanae Tsuruoka, Koichi Miyahara, Megumi Hara, Yoichiro Ito, Kenichiro Nakayama, Takuya Shimamura, Takahiro Noda, Takahiro Yukimoto, Ryo Shimoda, Ryuichi Iwakiri, Kazuma Fujimoto</p> <p>[要 旨] 目的：非静脈瘤性上部消化管出血に対し緊急内視鏡的止血術を施行した患者に関して、海外では診療時間外に受診した患者は診療時間内に受診した患者よりも予後が悪く、入院患者では外来患者よりも予後が悪いとの報告がある。日本では同様の検討の報告がなく、本研究では i)診療時間内に受診した患者と時間外に受診した患者、ii)入院患者と外来患者の予後の違いを検討した。 方法：2008年1月から2014年の12月までの非静脈瘤性上部消化管出血に対し緊急内視鏡止血術を施行した443人の患者を対象とした。入院患者と外来患者の2群に分類し、外来患者は受診時間が時間内か時間外かの2群にさらに分類した。それぞれの患者の背景や予後を検討した。 結果：診療時間外に緊急止血術を施行された患者は診療時間内に施行された患者と比較し、内視鏡的止血術を施行されるまでの時間は有意に長かったが、予後に差はなかった。入院患者は、死亡、輸血の必要性、入院期間などで検討すると、外来患者よりも予後が悪いことが分かった。外来患者に比較して入院患者では有意に高齢であり、低栄養で糖尿病や悪性腫瘍の合併例が多いことが判明した。 考察・結論：非静脈瘤性上部消化管出血に対し緊急止血術を施行された患者の予後は診療時間内であっても時間外であっても違いはない。入院患者では外来患者に比べて予後が悪く、入院患者の状態の悪さが主な原因である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 ① 甲 · 乙	第 号	氏 名	白井 慎平
<p>[論文題名]</p> <p>Immunogenicity of Quadrivalent Influenza Vaccine for Patients with Inflammatory Bowel Disease Undergoing Immunosuppressive Therapy</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Inflammatory Bowel Diseases, in press</p> <p>著者名</p> <p>Shimpei Shirai, Megumi Hara, Yasuhisa Sakata, Nanae Tsuruoka, Koji Yamamoto, Ryo Shimoda, Yasuhiro Gomi, Hironori Yoshii, Kazuma Fujimoto, Ryuichi Iwakiri</p> <p>[要 旨]</p> <p>背景と目的：4 価インフルエンザワクチンの成人炎症性腸疾患患者に対する治療法による免疫原性と追加免疫効果について検討した。</p> <p>方法：成人炎症性腸疾患患者に対して単回接種群と追加免疫群を無作為に割り当て、4 価インフルエンザワクチンを皮下投与した。血清サンプルを単回摂取群では3点で採取し、追加免疫群では4点で採取した。各インフルエンザ株に対する抗体力価（HI 価）を測定した。幾何平均抗体価（GMT）、上昇倍率（GMTR）、seroprotection rate (SP%)、seroconversion rate (SC%)を算出し、国際基準に則って免疫原性を評価した。接種回数や治療が免疫原性に及ぼす影響を評価した。</p> <p>結果：132 人の炎症性腸疾患患者が登録された。22 人の患者が免疫調整薬単剤療法を受け、16 名が抗 TNF-α 製剤単剤療法を受けていた。15 人が免疫調整薬と抗 TNF-α 製剤の併用療法を受けていた。いずれのワクチン株に対しても1回接種で国際基準を満たす免疫原性を示した。追加接種による更なる抗体価の上昇は認めなかった（幾何平均力価：H1N1：p = 0.81；H3N2：p = 0.79；B/ Phuket：p = 0.82；B/Texas：p = 0.84）。抗 TNF-α 製剤（特にインフリキシマブ）を投与されている患者で、血中濃度が保たれている患者ではインフルエンザ A 型に対する抗体酸性が低かった（SP%：OR 0.22 (0.07-0.68), SC%：0.19 (0.06-0.56)）。</p> <p>結論：4 価インフルエンザワクチンは、炎症性腸疾患患者に対しても1回接種で十分な免疫原性を示し、追加接種による追加免疫は得られなかった。インフリキシマブ治療中の患者では免疫原性が低いことが明らかとなった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	中村 志織
<p>[論文題名]</p> <p>The Effect of Pottery Therapy on Heart Rate Variability in College Students with Mental Health Problems</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Mental Disorders and Treatment Volume 3: Issue 1. doi: 10.4172/2471-271X.1000144. 2017</p> <p>著者名 中村志織、曾根崎修司、林田行雄、佐藤武</p> <p>[要 旨]</p> <p>1. 研究の目的 佐賀大学保健管理センターでは、学生の心身の状態の改善を目指した支援の一つとして陶芸療法を実施している。療法が自律神経機能にどのような影響を及ぼしているのか、心拍変動解析を用いて客観的に示すことを目的とした。</p> <p>2. 方法 精神的な問題を抱え、センターに通所する学生 11 名 (平均年齢 20.6±1.4 歳、うち男性 6 名、女性 5 名) を対象に、器や置物などを作るグループセッションを実施した。療法の前後に、左右の腕の内側に心電計のパッドを貼り、5 分間の心拍変動測定を行った。なお、同一対象者が制作を行わなかった場合を対照群のデータとした。研究期間は平成 27 年 9 月から平成 29 年 3 月の間、実施場所は佐賀大学保健管理センター内リラクゼーションルームである。</p> <p>3. 結果 11 名を対象に、療法群と非療法群を比較した結果、療法群では、ポアンカレプロットパラメーターの SD1、SD2、S、および RMSSD が有意に拡大した。(p<0.05)。しかし、LF/HF では有意な変化は見られなかった。(p = 0.374) 非療法群では、いずれの数値も有意な変化は見られなかった。</p> <p>4. 考察 療法の効果はこれまで質問紙や質的研究によって報告されてきているが、本研究では心拍変動を用いて生理学的変化を示すことができた。</p> <p>5. 結論 本研究における新しい知見は、ポアンカレプロットを用いた心拍変動解析において、陶芸療法が自律神経系機能の安定化に有効であることを示唆したことにある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏 名	野中 小百合
<p>[論文題名]</p> <p>Incidence of aspiration pneumonia during hospitalization in Japanese hospitalized cases did not increase whereas concern factors were exacerbated in a time-dependent manner: analysis of DPC data</p> <p>Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition, (in press)</p> <p>著者名</p> <p>Sayuri Nonaka, Susumu Fujii, Megumi Hara, Shigeki Morita, Eisaburo Sueoka, Koichi Node, Kazuma Fujimoto</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】高齢者の死亡原因の上位に誤嚥性肺炎がある。当院入院中における誤嚥性肺炎の発症率を調査し、DPC データから発症に関係する因子を明らかにした。</p> <p>【方法】当院 DPC データ(2010～15 年)の 63,390 症例から、入院後併存症に誤嚥性肺炎の記載があれば発症症例とした。非発症群と発症群で様式 1 から得られる情報(性別、年齢、予定(外)入院、救急車搬送、嚥下障害の有無、ICU/ECU 利用の有無、手術の有無)から多変量解析にて関係因子を明らかにした。2010～12 年と 2013～15 年で前後期に分け、誤嚥性肺炎発症率と関係因子の関係性を分析した。</p> <p>【結果】男性、年齢、ICU/ECU の利用、救急車利用、嚥下障害が誤嚥性肺炎発症の有意な関係因子であり、手術症例では有意に発症率が低かった。後期では年齢と嚥下障害、手術症例数が有意に増えていた。誤嚥性肺炎の発症率は後期で低かった。</p> <p>【考察】年齢や性別、嚥下障害などが誤嚥性肺炎発症の危険因子であり、先行する研究結果と一致していた。危険因子を伴う症例は後期において増加していたが、誤嚥性肺炎の発症率は減少していた。手術症例のように状態管理がされている場合は発症率を下げており、後期では誤嚥性肺炎の減少と考えあわせ、何かしらの予防措置が誤嚥性肺炎発症を抑制するのに有効であることが示された。</p> <p>【結論】今後は具体的な予防措置について調査し詳細に明らかにしたい。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	森田 由佳
<p>[論文題名]</p> <p>Increased activity in the right prefrontal cortex measured using near-infrared spectroscopy during a flower arrangement task</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>International Journal of Psychiatry in Clinical Practice In press</p> <p>著者名</p> <p>Yuka Morita, Fumio Ebara, Yoshimitsu Morita & Etsuo Horikawa</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的: フラワーアレンジメント(FAP)は,病院や福祉施設で園芸療法の一つとして行われている.しかし,評価方法は,行動観察など主観的なものが多く,客観的研究に基づいた報告は少ない.そこで本研究の目的は,FAP の効果を近赤外分光法 (NIRS) を使った脳活動の変化と,唾液アミラーゼ活性(sAA)の測定で示すことである.</p> <p>方法: NIRS は WOT-220(HITACHI)を使用し,脳血流中のヘモグロビン量を測定した. sAA は,唾液アミラーゼモニター (ニプロ) を使用し測定した.FAP は,指示書に書かれた材料の配置を一時的に記憶し,正しい位置に材料を配置する. 対照としてブロックタックタスク (BTT) を行った.</p> <p>結果:脳活動は右前頭前野で安静時と FAP 時, 安静時と BTT 時に有意差が見られた. sAA は安静時と FAP 後に, FAP 後と BTT 後に有意差が見られた.</p> <p>考察: NIRS により, FAP により右前頭前野が賦活することがわかった. 右前頭前野は,視空間ワーキングメモリへの関与が大きいとの報告がある. また BTT は視空間ワーキングメモリを評価する指標である. よって FAP は視空間ワーキングメモリを賦活することが示唆された. sAA の結果から, FAP 時は BTT 時よりストレスが低い状態であった. 視空間ワーキングメモリを必要とする課題において, FAP の方がよりストレスが低い状態で行うことができることが示唆された.</p> <p>結論: FAP によるストレス軽減効果と脳賦活効果を示すことができた.今後,FAP を患者のリハビリテーションに応用し,その際の治療効果判定の一助となると考えられる.</p>			

備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	行元崇浩
<p>[論文題名] The Palliative Effect of Endoscopic Uncovered Self-expandable Metallic Stent Placement Versus Gastrojejunostomy on Malignant Gastric Outlet Obstruction: A Pilot Study with a Retrospective Chart Review in Saga, Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Internal medicine, in press</p> <p>著者名 Takahiro Yuki moto, Tomohito Morisaki, Sho Komukai, Hisako Yoshida, Dai suke Yamaguchi, Nanae Tsuruoka, Koichi Miyahara, Yasuhisa Sakata, Shinichi Shibasaki, Seiji Tsunada, Takahiro Noda, Seiji Yunotani, Kazuma Fujimoto</p> <p>[要 旨] 目的: 内視鏡的胃十二指腸ステント留置術と胃空腸バイパス術はいずれも悪性胃十二指腸狭窄患者に対して緩和的治療として用いられる。今回の研究の目的は両者を比較すること、そしてステント術における臨床的成功を妨げる因子を明らかにすることである。方法: 2010年1月から2016年12月に悪性胃十二指腸狭窄に対して緩和的治療を行った65名を対象とした。内視鏡的ステント留置術(S群)は38名に行われ、胃空腸バイパス術(B群)は27名に行われた。結果: S群とB群の比較において技術的成功、臨床的成功、術後血漿蛋白質、退院率、食事摂取不能となってから死亡するまでの期間、術後生存期間に有意差は無かった。術後に抗癌剤治療を受ける事ができた患者はB群で有意に多かった(51.4% vs. 26.3%; P = 0.042)。治療から食事摂取可能となるまでの期間はS群において有意に短かった(4.5 vs. 3.0 days; P = 0.013)。S群における臨床的成功因子は有意差はでなかったものの、留置するステントが長いほど臨床的成功率が低い傾向にあった(OR: 0.60, 95%CI: 0.36- 1.01, P = 0.053)。結語: S群では食事摂取開始は早く、それ以外は両群で差はなかった。内視鏡的ステント留置術は悪性胃十二指腸狭窄患者に対する緩和的治療として有効な手段の一つである。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	岡田 倫明
<p>[論文題名] かかりつけ医、家族、知人、職場からの勧めは肝炎に関する受検・受診・受療の患者意思決定に影響する</p> <p>Recommendations from primary care physicians, family, friends, and work colleagues influence patients' decisions related to hepatitis screening, medical examinations, and antiviral treatment</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>雑誌名 : Experimental and Therapeutic Medicine, in press</p> <p>著者名 Michiaki Okada, Satoshi Oeda, Naoko E Katsuki, Shinji Iwane, Yasunori Kawaguchi, Saori Kawamoto, Yoshimi Tomine, Jun Fukuyoshi, Keishiro Maeyama, Hideo Tanaka, Keizo Anzai, and Yuichiro Eguchi</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 肝炎診療は(1)受検：肝炎ウイルス検査、(2)受診：精密検査、(3)受療：抗ウイルス治療、の3ステップに分かれる。今回受療中の患者を対象に、どの情報が効果的だったかを調査。</p> <p>【方法】 患者182人に、18個の情報源について、受検・受診・受療の各ステップでどの程度触れ、その中で直接の契機となった情報源について聞き取り調査を施行。</p> <p>【結果】 かかりつけ医からの勧めは最も接した情報源(受検 64.3% , 受診 77.5%, 受療 75.8%)で、保健師・家族・知人・職場からの勧めがそれに続く人からの勧めだった(3.3-19.8%)。かかりつけ医からの勧めは最も強い影響力(76.9%, 73.0%, 77.5%)があり、保健師(50.0%, 26.3%, 64.3%)、家族・友人 (58.3%, 38.9%, 58.3%)、職場 (33.3%, 33.3%, 42.9%)からの勧めも強い影響力があった。TVCM等のメディアは情報源として接するが、影響力は強くなかった。</p> <p>【考察】 かかりつけ医からの勧めは接する機会も多く影響力もあり、肝疾患に関心のあるかかりつけ医を増やすことが重要。家族・知人・職場からの勧めは影響力を持つが認知度が低く、認知度の高いメディアを使うことで、それに接する機会を増やすことが望ましい。</p> <p>【結論】 かかりつけ医、家族、知人、職場からの勧めは肝炎に関する受検・受診・受療の患者意思決定に影響する。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	古賀 浩木
<p>[論文題名] Occult hepatitis B virus infection and surgical outcomes in non-B,non-C patients with curative resection for hepatocellular carcinoma</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 World journal of hepatology, 9 巻 (35 号) ,1286-1295 頁,2017 年</p> <p>著者名 Hiroki Koga, Keita Kai, Shinichi Aishima, Atsushi Kawaguchi, Koutaro Yamaji, Takao Ide, Junji Ueda, Hirokazu Noshiro</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的: NBNC 肝癌の risk factor として、糖尿病・NASH・肥満などの metabolic factor や飲酒など様々な因子が報告されているが、近年オカルト HBV が着目されている。NBNC 肝癌症例におけるオカルト HBV 感染状況を解析し、各因子が予後や再発に与える影響について検討した。</p> <p>方法: 1984 年から 2012 年までに初回手術を行った原発性肝癌 477 例のうち、HBs 抗原、HCV 抗体が陰性の NBNC 肝癌 83 例中非癌部からの DNA 抽出が可能であった 78 例について解析。背景肝より DNA を抽出し RT-PCR 法により検出。2 項目以上で DNA 増幅を認めた症例をオカルト HBV 症例とした。</p> <p>結果: 平均年齢は 66.3±11.9 歳。アルコール多飲 19 例(24.4%)、糖尿病 27 例 (34.6%)、肥満 24 例(30.8%)、NASH が 8 例(10.3%)であった。27 例 (34.6%) でオカルト HBV 陽性であった。オカルト HBV 陽性例と陰性例で、臨床病理学的因子、肝の線維化、予後、再発に関する解析を行ったが、有意差はなかった。各因子と予後に関して多変量解析にて解析したところ、OS に関しては Vp が有意因子であった (p=0.0378)。DFS に関しては Vp が有意因子であった (p=0.0217)。</p> <p>考察: NCNB 肝癌切除例の約 30%でオカルト HBV 感染を認め、約 80%で HBV 遺伝子の一部が検出された。我々は、オカルト HBV 陽性群は再発率が高く、予後不良という仮説を立てていたが、予後を規定しているのは腫瘍因子で、オカルト HBV 感染と術後の再発・予後との間に関連性は認めなかった。</p> <p>結論: 今回の解析では NBNC-HCC 切除例のうち 34.6%にオカルト HBV 感染を認めたが、オカルト HBV 感染と予後に関連性を認めなかった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	小野原 貴之
<p>[論文題名]</p> <p>Plasma adsorption membranes are able to efficiently remove High Mobility Group Box-1 (HMGB-1)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Journal of Nippon Medical School, in press</p> <p>著者名</p> <p>Takayuki Onohara, Yuichiro Sakamoto, Satoshi Inoue</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 HMGB-1 は敗血症における致死的中介因子であり、治療標的として注目されている。しかし HMGB-1 を標的とした急性血液浄化療法については一定の見解を得られていない。自己免疫疾患治療に臨床応用されている血漿吸着療法カラムを用いて HMGB-1 が除去されるかを明らかにするために本研究を実施した。</p> <p>【方法】 血漿吸着療法に用いる 3 種類のカラム (IM-TR、IM-PH、BRS) の 1/350 スケールカラムを作成した。HMGB-1 を含有するとされるウシ胎児血清を用い、カラムに通した。実験開始後 25 分、50 分、75 分での HMGB-1 除去率を求め、総除去量を算出した。</p> <p>【結果】 IM-TR で最も効率的に HMGB-1 を吸着し、25 分時点で約 90% の除去率であった。BRS はどの時相においても約 50% の除去率であり、IM-PH では 10% 以下であった。総除去量は 3 群間で有意差を認めた。</p> <p>【考察・結論】 HMGB-1 は約 30kDa の蛋白質であり、通常の濾過膜ではなく吸着原理が必要と考えられている。吸着リガンドは IM-TR がトリプトファン、IM-PH がフェニルアラニン、BRS は陰イオン交換樹脂である。血漿吸着療法では疎水相互作用、静電相互作用が関与し、疎水性の強さが HMGB-1 除去能に関与していると考えられた。HMGB-1 は血漿吸着療法カラムにより吸着され、安全に敗血症治療に適応できる可能性を見出した。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲 乙	第 号	氏 名	田中 達也
<p>[論文題名] Possible involvement of pericytes in intraplaque hemorrhage of carotid stenosis</p> <p>雑誌名，巻（号のみの雑誌は号），頁一頁，発行西暦年 雑誌名：Journal of Neurosurgery,in press</p> <p>著者名 田中達也，緒方敦之，増岡淳，溝上泰一郎，若宮富浩，中原由紀子，井上浩平，下川尚子，吉岡史隆，桃崎宣明，坂田修治，阿部竜也</p> <p>[要 旨] 研究の目的：プラーク内出血（IPH）は、多くの場合、新生血管の破裂に起因する。しかし、血管内新生血管脆弱性の要因は不明である。本研究では、周皮細胞に焦点を当て、IPH と周皮細胞との関係を調べることを目的とした。 方法：2008年8月から2016年3月までの間に、53患者、頸動脈狭窄56病変に対し、頸動脈内膜切除術を施行し、標本を採取した。glycophorin A染色を用いてIPHを評価し、high IPH（陽性染色面積>10%）およびlow IPH（陽性染色面積<10%）の2群に分けた。さらに、内皮細胞新生血管を、内皮細胞マーカーとしてのCD34染色、またはペリサイトマーカーとしてのNG2およびCD146染色で評価した。IPHとプラーク内新生血管の関係を検討した。 結果：56病変の頸動脈狭窄のうち、37病変はhigh-grade IPHであり、19病変はlow-grade IPHであった。CD34陽性新生血管の数は2群間で有意差はなかった。しかし、NG2およびCD146陽性新生血管の密度は、high IPH群ではlow IPH群よりも有意に低かった（5.7 ± 0.5 対 17.1 ± 2.4、$p < 0.0001$ および 6.6 ± 0.8 対 18.4 ± 2.5、$p < 0.0001$）。 結論：high-grade IPHを有するプラークは、プラーク内新生血管周皮細胞数が少ないことと関連することが示唆された。我々の知見は、周皮細胞を標的とする新規治療戦略の開発に役立つ可能性がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的，方法，結果，考察，結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	本武 敏弘
<p>[論文題名]</p> <p>A study on work engagement among nurses in Japan: the relationship to job-demands, job-resources, and nursing competence</p> <p>Journal of Nursing Education and Practice、Vol 6(5),111-117,2016</p> <p>Toshihiro Hontake, Hiromi Ariyoshi</p> <p>[要 旨]</p> <p><研究の目的>看護師のワーク・エンゲイジメント(Work Engagement:以下 WE)の実態、および「仕事の要求度(Job-Demands:以下 JD)」「仕事の資源(Job Resource:以下 JR)」との関連、JRが「看護実践能力(Nursing Competence:以下 NC)」に与える影響におけるWEが媒介する効果を明らかにする。</p> <p><方法>看護師917名を対象に、Utrecht Work engagement Scale、Brief Scales for Job Stress-Nurse、Clinical Nursing Competence Self-Assessment Scaleを用いて調査した。</p> <p><結果>JDは、WEと負の相関、JRは、WEと正の相関であった。JRのサブスケールの中でも「達成感」は強い影響を与えていた。パス解析の結果、WEは、JRとNCの間を有意に媒介していたが、モデルを十分に説明できる結果ではなかった。</p> <p><考察>先行研究では「達成感」は「自己効力感」の構成概念であり、「自己効力感」はWEに影響を与えていることが明らかにされており、「達成感」は、「自己効力感」の一部として、WEに影響を与えていたと考えられる。JRが「看護実践能力」に与える影響にワーク・エンゲイジメントが媒介する効果は明らかにされず、概念枠組みを含めて研究方法を検討する必要がある。</p> <p><結論>JRはJDを高めていた。JDもWEに影響を与えていたが、その程度は低かった。JRがNCに与える影響においてWEが果たす役割は限定的であった。</p>			

- 備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。
- 2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。